

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370584

研究課題名(和文)多言語多文化キャンパス構築に必要な能力養成のための調査・研究

研究課題名(英文) Research on abilities and education to create "multilingual and multicultural campus"

研究代表者

田崎 敦子 (TASAKI, ATSUKO)

東京農工大学・国際センター・准教授

研究者番号：10272642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語能力のレベルにかかわらず誰もが仲間と共に学習・研究を進めることができる「多言語多文化キャンパス」を構築するために留学生、日本人学生に必要な能力を示し、そのための教育に寄与することを目的として行った。3年間の研究を通して日本語能力のレベル別に留学生が大学で人間関係構築しつつ、学習・研究を行うために必要な日本語能力、及び日本人学生の調整能力を明らかにし、教育への示唆を得た。一方、日本人学生と留学生に対して英語で行う異文化間コミュニケーション教育では、彼らが大学というコミュニティを形成するための支援の必要性を踏まえ、日本語と英語の二言語で行う活動デザインを提案した。

研究成果の概要(英文)：This study revealed the Japanese language and intercultural communication abilities required by Japanese and international students to create a "multilingual and multicultural campus" in which they can cooperatively study and conduct research regardless of the international students' levels of Japanese. The study employs bilingual situations using Japanese and English. It also includes suggestions for the education of both Japanese language and intercultural communication to enable the cultivation of the abilities presented through the results of this study.

研究分野：日本語教育、異文化間コミュニケーション

キーワード：日本語能力 異文化間コミュニケーション能力 大学院 英語 多言語多文化キャンパス グループディスカッション ゼミ 質疑応答

## 1. 研究開始当初の背景

従来、日本の大学で学ぶ留学生は、学習・研究を遂行できる高い日本語能力が求められていた。しかし、現在この状況は大きく変化している。グローバル化の一環として留学生の受入れを推進する多くの大学は、英語で学位を取得できるコースを設置するようになった。政府による「留学生 30 万人計画」にも、大学のグローバル化推進の具体的方策のひとつとして「英語のみによるコースの拡大」が挙げられている(文部科学省, 2010)。

こうした状況の中で、大学には日本語能力の低い、または皆無の留学生が増え、キャンパスの共通言語が日本語と英語になりつつある。今後、大学の日本語教育は、こうした留学生の日本語能力に対応し、大学で学び、生活するためにそれぞれのレベルで必要な能力を養成することが求められている。また、日本語能力が低い留学生の増加や英語使用の推進に伴い、日本語と英語の二言語使用場面を想定し、そこで求められる日本語能力も検討する必要がある。

一方、日本語能力が多様な留学生が増えれば、共に学ぶ日本人学生も留学生の日本語能力に合わせて自身のコミュニケーションを調整し相互理解を達成する能力を身に付けなければならない。

このように大学の言語使用状況、求められる能力は大きく変化しているが、現在こうしたニーズに対応した留学生の日本語教育や日本人学生も含めた異文化間コミュニケーション教育の必要性については十分認識されておらず、その教育内容・方法は確立されていない。

## 2. 研究の目的

留学生の日本語能力のレベルが多様化する大学の状況を受け、本研究では、日本語能力のレベルにかかわらず、誰もが「大学コミュニティ」に参画し仲間と共に学習・研究を

進めることができる「多言語多文化キャンパス」を構築するために留学生、日本人学生に必要な能力を示し、それを養成する教育内容・方法を示すことを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 学習・研究を遂行するために必要な

日本語能力・異文化間コミュニケーション能力 - 日本語のレベル別に -

「多言語多文化キャンパス」構築のために日本人学生、留学生に必要な日本語能力、異文化間コミュニケーション能力を把握するために、学習・研究を進める中で困難を感じるコミュニケーション場面について日本語能力が異なる留学生にインタビュー調査を行った。その結果、彼らは日本語のレベルにかかわらず、講義や研究室で頻繁に行われるグループディスカッションへの参加が困難であることがわかった。そこで、日本語能力初級レベルの留学生が日本人学生とのグループディスカッションに参加するために必要な日本語能力、及び日本人学生に必要な調整能力を明らかにするために、日本人学生、留学生で構成されるグループディスカッション(留学生の日本語のレベル別)の録画・録音資料、その文字化資料を分析し、ディスカッションを妨げる要因を明らかにした。

上級レベルの留学生のグループディスカッションは、特に日本語能力の高い留学生が多い中国人留学生を対象に、中国語母語場面、日本語母語場面の録画・録音資料、その文字化資料を基に、発話の機能を比較・分析し、ディスカッションの進め方の相違点を示した。

### (2) 英語使用場面に必要な日本語能力

日本語と英語の二言語使用を想定し、英語を主言語とする場面で必要な日本語能力を検討するための研究では、学生の研究活動の中心となるゼミの議論を分析対象とした。同

じ日本人教員が日本人学生と日本語で、留学生と英語で行った質疑応答の録音資料、その文字化資料を基に会話分析の手法で談話の進め方を比較し、その結果から英語使用場面で効果的に働く日本語の談話能力を示した。

### (3) 英語で行う異文化間コミュニケーション教育の方向性

日本人学生と留学生に対する異文化間コミュニケーション教育については、英語で研究活動を行う専攻で行った講義の実践研究を通して、英語を主言語として大学院生活を送る学生のニーズに合った教育の役割、目的、活動デザインを検討した。

まず、専攻内の日本人学生と留学生は研究のこと以外はあまり話さないというインタビュー調査の結果を踏まえ、講義に自分たちの経験を共有できる活動を取り入れた。その際、留学生が学んでいる日本語をもうひとつの共通言語として導入し、日本語と英語の二言語使用を促した。

上記の講義で行われた学生間のコミュニケーションの録音資料、その文字化資料を基に日本語の発話の機能や話し合いの内容を分析し、二言語使用の効果について検討した。これらの結果や受講者による講義の評価から、英語を主言語とした専攻で行う異文化間コミュニケーション教育の役割を示し、最後に彼らのニーズに合った教室活動を提案した。

## 4. 研究成果

### (1) グループディスカッションに

必要な能力 - 日本語のレベル別に -

日本語初級レベルの留学生と日本人学生のグループディスカッションでは、日本人学生が使用する日本語の次のような点が留学生の参加を困難にしていることがわかった。

未習語の多用、文構造の複雑さ、留学生のために言い換えた日本語、英語の複雑さ。

留学生もこうした問題に対応するためのストラテジーを使用できていなかった。一方、同じ初級レベルの留学生が日本語上級レベルの留学生と行ったグループディスカッションを分析したところ、上級レベルの留学生は上記のような日本語を使用せず、両者の相互理解、意見交換がより円滑に進められていた。

このことから、グループディスカッションに必要な日本人学生の日本語使用の調整のポイント、初級レベルの留学生のストラテジー能力が把握でき、彼らの教育にその養成を取り入れる必要性が示唆された。また、初級レベルの日本語クラスで行う教室活動では、日本人学生とのグループディスカッションの前に上級レベルの留学生とのグループディスカッションを行うことにより、留学生がディスカッションの参加方法を段階的に学べることもわかった。

日本語上級レベルの中国人留学生については、中国語母語場面、日本人学生の日本語母語場面のグループディスカッションで使われた発話の機能分類を基に比較・分析を行った。その結果、以下のような相違点が明らかになった。どちらの場面も「情報提供」の機能を持った発話が最も多かったが、中国語母語場面は既に示されている意見に対する情報提供が中心であったのに対して、日本語母語場面では基になる意見はなく何に対する情報提供なのか不明な発話が多かった。

どちらの場面にも「(話し合いの)方向の確認」の発話が見られたが、その目的が異なっていた。日本語母語場面では、参加者の考えをまとめようとする発話だったのに対し、中国語母語場面では、話し合いが目的から逸れた際にそれを修正しようとするものであった。どちらの場面にも「賛成の表示」が見られたが、日本語母語場面の方がその使用は多かった。一方、「反対の表示」は、中国語母語場面のみで使われていた。

こうした結果を日本語教育に取り入れることにより、中国人留学生在日本人学生とのグループディスカッションの展開を予測できるようにになれば、彼らの困難は軽減されると考える。一方、日本人学生に対する異文化間コミュニケーション教育では、彼らにこうした相違点を理解させ、自分たちのスタイルを調整できる能力を養成する必要性が示唆された。

## (2) 英語使用場面に必要な日本語能力

- ゼミの質疑応答を対象に -

英語で研究活動を行う留学生在ゼミの議論に参加する際に必要な日本語能力に関しては、日本人教員が日本人学生と日本語で、留学生と英語で行われた質疑応答における談話の進め方の比較・分析を通して検討した。その結果、日本語の質疑応答は共話的に進められ、相互行為を通して徐々に内容が深められていたが、英語の場合は、共話的に進めようとする日本人教員に対し、留学生は自分の意見を述べるために長いターンをとっていた。そのため、ターン・テークがうまく行われず、互いの意見が十分に理解されたとはいえない質疑応答になっていた。

このことから、英語で研究活動を行う留学生に対する日本語教育では、初級段階から日本語の談話能力を養成し、日本人との英語使用場面においてもそれを活かせるようにする指導が必要であることがわかった。また、英語で学習・研究を行う大学の日本語教育には、言語により談話の進め方に相違があることを日本人の教員や学生に対して発信する役割があることも確認された。

## (3) 英語で研究活動を行う専攻における異文化間コミュニケーション教育への示唆

英語で行う異文化間コミュニケーション教育については、使用言語として設定されている英語に加え、留学生在学している日本語

を導入することにより、日常生活の情報や経験を共有し、その意味づけを行うコミュニケーションが促進されることがわかった。これは、彼らの生活に根ざした日本語で日常生活を描写することにより、その経験や情報がより現実的で身近になったからだと考える。

講義で上記のようなコミュニケーションを促進することにより、日本人学生と留学生の間と同じ専攻で学ぶ仲間としての関係が構築されていったことがコミュニケーションの分析や授業評価からわかった。それは、彼らが所属する専攻をひとつの共同体にしていく過程であり、彼らの研究活動の支援につながるものだと言える。本研究では、こうした支援を英語で研究活動を行う専攻における異文化間コミュニケーション教育の役割と捉え、そこで行う教室活動として、自分たちの生活に関連したある事象の分析から、経験を共有、意味づけするグループワークの内容、手順を示した。

以上、本研究では、大学で学ぶ留学生の日本語能力の多様化を踏まえ、その能力にかかわらず大学というコミュニティに参画するために必要な日本語能力、留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力を示し、その教育への示唆を得た。英語使用が広まる状況を受け、対象に英語使用場面も含め、そこで効果的に働く日本語能力を示したことは、本研究の特長的な成果だと言える。

しかし、本研究で示した能力は限られたものであり、多言語多文化キャンパス構築のためにはさらなる調査を進め、日本人学生、留学生に必要な能力を精査していく必要がある。今後も、そのための調査・研究を続けていく予定である。

<引用文献>

文部科学省高等教育局(2010)「留学生政策の具体的展開」<<http://www.mext.go>.

jp/component/a\_menu/education/detail/\_ics  
Files/afieldfile/2010/12/14/1286522\_1.pdf

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

田崎敦子(2015)「日本人学生と留学生の文化の捉え方の相違 コミュニケーション促進の観点から」『日語教育と日本学』第6号, 14-22, 査読有.

田崎敦子(2015)「英語を主言語としたゼミで効果的に働く日本語の談話能力 - 日本語母語話者と非母語話者間の議論の促進を目指して -」『異文化間教育』42号, 91-102, 査読有.

小熊貞子・田崎敦子・上原真知子・中川和枝(2014)「日本語母語話者と学習者のグループディスカッションにおける話題発展のプロセス - 相互行為の促進要因に着目して -」『多摩留学生教育研究論集』第9号, 29-36, 査読有.

張穎・田崎敦子(2014)「助言談話の中日比較 - ストラテジーに着目して -」『日語教育と日本学研究』87-90, 査読有.

田崎敦子・周郭(2013)「グループ討論における言語行動に関する中日比較 討論の進め方に着目して」『日語教育と日本学研究』98-101, 査読有.

田崎敦子(印刷中)「英語で研究活動を行う大学院における異文化間コミュニケーション教育の役割 - 英語と日本語で経験を共有する場として -」『留学生交流・指導研究』Vol.18, 査読有.

田崎敦子(印刷中)「短期留学で行う研究活動の意義と可能性 - 日本語専攻の中国人留学生の事例を通して -」『日語教育と日本学』第7号, 査読有.

[学会発表](計5件)

田崎敦子(2015)「短期留学で行う研究に求められること - 日本語専攻の中国人留学生の事例を通して -」『2015年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム』138-139, 中国日本語教育研究会上海分会, 2015年5月16日, 上海理工大学, 上海(中国).

田崎敦子(2015)「英語を共通言語とする大学院における異文化間コミュニケーション教育の役割 - コミュニティ形成の観点から -」『異文化間教育学会第36回大会発表抄録』54-55, 異文化間教育学会, 2015年6月6日, 千葉大学(千葉県千葉市).

張穎・田崎敦子(2014)「助言談話の中日比較 - ポライトネス理論の観点から -」『2014年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム』20-23, 中国日本語教育研究会上海分会, 2014年5月17日, 同济大学, 上海(中国).

田崎敦子(2014)「コミュニケーションの促進につながる文化の捉え方 日本人学生と留学生の比較を通して」『2014年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム』140-143, 中国日本語教育研究会上海分会, 2014年5月17日, 同济大学, 上海(中国).

周郭・田崎敦子(2013)「小集団討論における言語行動に関する中日比較 討論の進め方に着目して」『2013年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム』264-265, 中国日本語教育研究会上海分会, 2013年5月26日, 同济大学, 上海(中国).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田崎 敦子 (TASAKI, Atsuko)

東京農工大学・国際センター・准教授

研究者番号：10272642

(2)連携研究者

渡邊裕純 (WATANABE, Hirozumi)

東京農工大学・大学院農学研究院・教授

研究者番号：80323757

山田祐彰 (YAMADA, Masaaki)

東京農工大学・大学院農学研究院・准教授

研究者番号：60323755